（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　石井龍太

本研究は琉球近世の物質文化について、発掘で出土する普遍的な考古遺物である瓦、植木鉢、きせるの３種類をとりあげ、遺物自体の詳細な観察と分析を基本としつつも、当時の文献記録、絵画資料、一部民俗学的な情報まで含めて総合的に解明するとともに、この３種類の遺物のありかたの重ね合わせによって琉球近世物質文化の特性とアジアにおける位置づけについて考察したものである。

近世を対象にする考古学的研究の背景には、土木工事などで破壊される都市遺跡などの記録保存という目的を中心に多くの発掘調査がなされるようになったことがあるが、それだけに考古学の諸分野の中ではもっとも新しく開発された分野である。本研究は文化財保護の要請から膨大に蓄積されつつある資料を純粋に歴史研究という学問的目的で解明、統合し、文献史学とは別の観点から琉球の歴史を理解しようとする点で、従来試みられることの少なかった分野の独創的研究である。

瓦についての研究では近世琉球最大の窯場であった那覇市湧田窯出土の資料を中心に、消費地での出土品とともに文様、製作技法、色調、笵の材質などの丹念な観察と分類、また文様を加えるための笵の個体識別を悉皆的に行い、消費地に残された瓦に使用された笵との異同の識別によって生産体制、生産地と消費地の対応関係を解明した。また琉球の中でも本島と宮古島、石垣島では類似のデザインの瓦をそれぞれ独自に生産・消費していることが解明された。文様的には滴水瓦という中国に起源する基本形に従いながらも独自のデザインを琉球全体で保持していること、年代的に色調が変化するなど、多くの歴史的事実が指摘された。

植木鉢、キセルについても同様な観点から検討がなされ、アジアの中での琉球の独自性、社会的な機能が解明されたが、後者については文献資料、絵画資料の活用による考察が大きい。

物質文化から見た近世琉球は、国内の自給体制の整備を最大の特徴とし、そのような観点からすると、薩摩の侵攻をもって琉球近世の画期とする政治史・制度史的な区分との間にずれがあることを指摘する。

取り上げられた３種類の遺物を、社会の異なる側面を照射するものとしてより高い視点で統合することが望まれ、琉球物質文化のありかたを政治・社会との相関関係の中に位置付ける作業もなお不十分であるなど今後の課題も残るが、近世琉球の歴史と文化を発掘資料から解明する先駆的かつ本格的な試みとして本研究は高く評価される。よって本委員会はこの論文が博士（文学）の学位を授けるに値するものと結論した。